

畑作

白神ねぎ

○長ねぎ栽培について

今年は気温と湿度が非常に高く推移し、軟腐病や白絹病が発生しやすくなっています。

例年だと8月下旬から9月上旬にかけて残暑（猛暑）があるので早期防除に努めましょう！！

（軟腐病）

夏季の高温で多発。例年発生が見られる圃場では特に被害が心配される。

白絹病やネギアザミウマの傷口から軟腐病が感染する場合もあるので注意。

夏ねぎ：収穫間際であれば、スターナ水和（取-7日）、

ヨネボン水和（取-7日）、Zボルドー（取-）など

秋冬ねぎ：オリゼメート粒剤（取-30日）、スターナ水和、ヨネボン水和、Zボルドーなど

（白絹病）

地際の茎の周辺にクモの糸状の菌糸あり。茶褐色のツブツブ状が菌核。

25～30℃の高温、湿度が高い状態が続くと発生しやすい。土寄せ後に株元散布。

モンカット粒（取-30日）、モンガリット粒（取-14日）、ロプラー水和水（灌注、取-14日）など

※また、気温が高いことで、ネギアザミウマの発生が多くなっています。

病害と併せて防除を行いましょう。

白神山うど

○8月下旬以降は台風対策を万全に

① 高温多湿状態で株が枯れ上がります。

速やかに地表排水が行われるよう、明渠を掘ったり、排水路の点検を行ってください。

この時期に湿害にあった圃場の株は、伏せ込み後、腐りやすくなったり、揃いが悪くなるので排水対策はしっかり行って下さい。

② 強風による倒伏が考えられます。

摘心をまだ実施していないほ場のうち、茎長が1mを

大きく超え、台風や強風による倒伏が心配される場合は摘心を実施してください。

ただし、摘心が遅れると2次生長するおそれがあるため、8月下旬までには摘心して下さい。

倒伏すると、茎の刈り取り作業がしづらくなったり、新芽が動いたり、伏せ込み時に手間がかかります。

③ 株が倒伏した場合は、引き起こしを行わないでください。

株の引き起こしにより再度株が動くと、新芽がさらに動いてしまいますので、注意してください。

※8月下旬以降の湿害、強風被害は収量に大きく影響します。万全な対策をお願いします。

白神みょうが

○みょうが栽培について

（根茎腐敗病防除について）

まだ収穫していないほ場では、収穫3日前までに使用できるランマンフロアブル500倍又は、オラル顆粒水和水剤2,000倍を3 $\frac{3}{4}$ ℓ/m² (3,000 $\frac{3}{4}$ ℓ/10a) 使用して下さい。

（収穫時の注意点について）

・きれいに水洗いした後、水切りをしっかりと行い、柄を2cm以内に切りそろえて、切り口を乾燥させる。

・バックで出荷する場合には、1本6g以上のものを太さを揃え、1バック当たり55gで出荷。（A品9本までB品10本までとする）

・極端に色沢の悪い物、細い物、切り口が変色したものは出荷しない。

アスパラガス

○アスパラガス栽培について

高温多湿になれば、茎枯病や斑点病の発生が多くなります。病害の発生状況を確認しながら、右記薬剤による防除を行いましょう。

・茎枯病：ロプラー水和水剤（2,000倍）

・斑点病：ラリー水和水剤（4,000倍）

・両方発生：アフットフロアブル（2,000倍）

併せて、ネギアザミウマが発生しやすい時期となりますので、リーフガード顆粒水和水剤（1,500倍）やコルト顆粒水和水剤（4,000倍）の散布も考慮して下さい。

白神きゃべつ

○きゃべつ栽培について

8月中旬から8月下旬には、S646を10aあたり20kg追肥し、軽く中耕しましょう。生育が悪い場合は、30kg追肥しましょう。外葉が小さいと収量が落ちるため、外葉を大きくするよう追肥は必ず行いましょう。

8月中旬以降は、定植前に使用したプレパソフロアブル5等の効果が薄れてくるので、フェニックス顆粒水和水剤により害虫防除をしましょう。また、病気の発生も懸念さ

れるため、フェニックス顆粒水和水剤と一緒に、バリダシン液剤5を混用して、散布しましょう。

9月上旬から9月中旬には、結球始期になるため、NK23号を10aあたり20kgを追肥しましょう。

9月上旬以降には、再度、害虫防除をしましょう。病気に関しては発生を見ながら防除しましょう。このころの薬剤は前日まで使える薬剤を使用しましょう。それ以外の薬剤を散布すると、収穫適期を逃してしまう場合があるので使用時期には特に注意しましょう。

畝間・株間の除草は徹底しましょう。

稲作

営

農

情

報

【登熟の向上を図る水管理】

○登熟の向上を図るため、出穂30日後までは間断かん水を実施し、土壤水分を保持しながら稲体の活力を維持することが重要です。特に、開花後25日間は米粒が肥大するため、土壤水分が不足しないように注意します。

○高温対策として、用水を確保できる場合はかけ流しかん水を行う。かけ流したつぷりが困難な場合は飽水管理（たっぷり入水し自然落水後に田面が乾かないうちに再度たっぷり入水）を行う。用水がなかなか確保できない場合は湛水管理を行い、地温を下げ根の機能減退を防止します。特にフェーン現象などで乾燥した風が強い日は水をしっかり入れ蒸散による稲体の消耗を軽減します。※常に湛水状態にすると昨年のように水田内の水が湯になり根腐れを起こし、登熟による障害を受ける場合があるので注意が必要です。

○落水時期は、出穂30日後頃を目安としますが、稲の登熟度やほ場の作業性等を考慮してください。落水時期が早すぎると、根の機能が低下し登熟が妨げられるため、低温や日照不足により登熟が緩慢な場合や、生育が旺盛な場合は、落水時期を遅らせてください。

★カドミウム含有米の発生が懸念される地域では、**出穂期3週間後まで湛水管理を厳守**し、カドミウムの吸収を抑制してください。

【斑点米カメムシ類の防除対策】

水田内に出穂したカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場、休耕田等の雑草地に隣接したほ場では、出穂期10日頃のカメムシ防除のほかに**必ず出穂期24日後頃**にエクシード剤又はキラップ剤を畦畔を含めて散布します。

☆法面や休耕田等の雑草地は、稲の収穫2週間前までは草刈りをしないでください。

☆近隣に水稲以外の作物（野菜等）がある場合や、養蜂業者がいる場合は、薬剤散布前に情報交換を密にし、散布を実施して下さい。

【本田防除】

出穂期	8月			9月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
薬剤散布				薬剤散布		
草刈り						草刈り
収穫期				収穫期		

アカスジカスミカメ		成虫侵入	産卵	幼虫発生
出穂期後日数		0	7~10	21~24 28~34
防除体系	茎葉散布剤（長期残効性）		●	●
	湛水散布剤（粒剤）	●	●	●

分類	使用時期	使用薬剤	使用量(10aあたり)	使用回数
●	出穂期10日後頃	スタークル粉剤DL	3kg	3回以内
●	出穂期10日後頃	スタークル液剤10	1000倍150ℓ	3回以内
●	出穂期7~10日後	スタークル粒剤	3kg	3回以内
●	出穂期24日後頃	キラップ粉剤DL	3kg	3回以内
●	出穂期24日後頃	キラップフロアブル	2000倍150ℓ	3回以内

※アカスジカスミカメが多発しているほ場では、スタークル剤を用いる。

※1回目散布剤との連用を避けるため、追加防除剤はキラップ剤とする。